

Homo portans (運ぶヒト) の諸相

—モノ・身体・社会の結節点の一つとして—

川田 順造

I はじめに

シゴー氏は、技術と社会の関係について、研究を深める必要を指摘された。それを受けて私は、直立二足歩行を行うようになったヒトという動物のみに特有の、モノを運ぶ行為の諸相について考えたい。それは、モノ・身体・社会をつなぐ、重要な結節点の一つと思われるからだ。

運ぶ行為を考えると、モノの重さを支えるのに直接かかわる身体の部位、およびそれぞれに関わる道具としてのモノ（括弧内に記す）には、頭頂（巻いた布、輪）、前頭（帯）、肩（帯、棒、肩当て具）、肩から背の上部（重心の高い背負い具）、腰（重心の低い背負い具、腰で支え前にまわす籠）、前腕（把手つきの籠）などがある。

II 文化の三角測量

ヒトがモノを運ぶ行為の検討においても、私がかねてから提唱している「文化の三角測量」Triangulation of culturesの方法に従って、①西アフリカの黒人、②フランス人などヨーロッパの白人、③日本人、アメリカ先住民も含む黄人（モンゴロイド）、それぞれの身体特徴や育児法、それと密接に関連して、社会における慣用によって条件づけられた「身体技法」との関わりを問題にしたい。「運搬法」も、その一環として取り上げる。

身体特徴、およびそれと関連して社会における慣用によって条件づけられた「身体技法」とのかかわりでは、①サハラ以南アフリカの黒人、②近世以後のヨーロッパの住民、いわゆる白人、③アメリカ先住民も含むモンゴロイド（有境集団の「人種」としてではなく、身体特徴のおおまかな傾向を指示する便宜として、黒人、白人、モンゴロイドなどの呼称を用いる）それぞれにおける、以下のような特徴を指摘できる。

①における、四肢、とくに前腕と下腿が相対的に長いこと、骨盤の前傾、それに伴って身体の骨格構造上も容易になる、深前屈、および背をもたせかけない投げ足座位の慣用、頭上運搬の著しい発達【図1】（一部山岳傾斜地の多い地方、および東アフリカ海岸部では、前頭帯運搬も見られる）。男女とも歩容における外股歩き【図2】が顕著で、これは頭上運搬の安定度を高めることと相関している。

②における、肩と上腕の相対的な発達、腕を伸展させるス



図1 頭上運搬は、1人の人間が道具なしに、1度にこれだけの土器を運びうる唯一の方法であろう。マリ中部のセゲーで。前日に焼いた7個の壺を、この船着き場まで数キロの道のりを運んできた女性。（1989年、筆者撮影）



図2 収穫したトウジンビエの穂を家まで運ぶ女性。著しい外股歩きが、歩行時の頭の上下動を少なくしている。ブルキナファソ南部のゴーデンで。(1978年、筆者撮影)

前腕を曲げて提げる籠運搬、腰で支え前にまわす籠運搬の発達【図3】。

③における、身体構造上四肢が相対的に短いこと、腕よりは腰を重視し腕を引きつけるスポーツや武術（相撲、柔術、剣術）の発達、蹲踞と正座の慣用、肩で重心を支える棒運搬の発達、重心の低い背負い運搬（日本西南部の仙骨支え背負い具など）、アイヌ、南西諸島住民、アジア山岳地帯の住民の一部、アメリカ先住民などにおける、前頭帯運搬の発達。

社会との関わりでは、以下のような特徴を指摘できる。

①において、男性が土器を頭上運搬することの忌避（片方の肩に乗せ両手で支えて運ぶ）、女性の前屈した骨盤の上に嬰兒を、両脚を開いた深前屈姿勢で、女性の胴に布でくくりつけて運ぶ嬰兒運搬法。

②では、嬰兒を女性の身体にくくりつけて運ぶ慣習が、伝統的にきわめて微弱（両脚を真っ直ぐに伸ばして固定した嬰兒籠の発達）、

③では、嬰兒の運搬法は地域により多様だが、日本では女性の背の上部に、両脚が開く形で嬰兒をくくりつけ、嬰兒が両手を女性の肩にかける形で「おんぶ」することが多かった。日本中部以北の囲炉裏地帯で慣用されていた嬰兒籠（エジコなど）における、嬰兒が両脚をガニ股深屈させた姿勢で、長時間放置される慣行。アメリカ先住民では、嬰兒の横抱き運搬が多く、一部に両脚を伸ばして括る慣行もあるが、資料が不十分である。

III 運搬具をめぐる

運搬具を、社会がもつ価値観、人体と道具の関係についての指向性という観点から見ると、

①では、運搬具といえるようなものがほとんどないくらい、頭上運搬が発達、普及している。柄の短い鋏を、楽に前屈する長い上半身と長い腕を、鋏の長い柄のように使うことにもみられる「人体の道具化」



図3 本稿の②に含まれる、フランス人の物の運び方のさまざまが見られる18世紀の版画（Estampes de J.-B. Sevestre-Le Blond, Orléans, ca. 1775）。上段左端の男性や、下段右から3人目の女性に見られる、前腕に籠の柄を懸ける運び方は、ヨーロッパ（その影響の及んだアメリカ大陸の一部）や中国の一部に見られるが、①のサハラ以南アフリカや、③の日本にはなかった。

ポーツや武術（ボクシング、フェンシングなど）の発達、踵を地面につけた蹲踞ができないこと、作業姿勢としての高座位の慣用、肩から背の上部で支える、重心の高い背負い運搬、

の他の一例として、精巧に発達した頭上運搬をとらえることができる。

②では逆に、運搬具の多様化が著しく、とくに③における運搬具と対比すると、例えば、水を運ぶための肩当て（フランス語で *joug d'épaules*、英語で *yoke*）や、それにしばしば付随する、体の両側の水桶を固定する輪のように、機能の特化した物的装置を用いて、運搬を確実に容易にする指向性（川田の「技術文化論」におけるモデルAの「個人の巧みさに依存せず、誰がやっても同じ良い結果が出るように道具を工夫する」という、西洋文化の指向性）の表れた例と言える。それは、人体と道具のかかわりにおける、「道具の脱人間化」としてとらえることができる。

③における、両天秤による液体運搬に見られる、人体への着脱が自在・容易で物的装置として単純な道具を、使う人間の「巧みさ」で上手に使いこなすという、箸の使用とも共通する、②の指向性とは対照をなす道具観の表れと見ることができよう。上記②との対比でいえば、「道具の人間化」と性格づけられるだろう。同時に、これら二種の運搬具を用いるとき力を使う人体の部位が、②では肩と腕であるのに対し、③のうち特に日本では腰が重要な棒を用いた運搬が発達したことも、全体に重心の高い身体使用が多い②の価値志向との対比で興味深い。

③の一部ではあるが、アメリカ大陸とくに中米で発達した前頭帯運搬について述べておきたい。中米原産の植物である、リュウゼツラン科リュウゼツラン属のシザル（サイザル）アサ *Agave sisalana* Perr. や、強度はやや劣るがエネケン（ヘネケン）*A. fourcroydes* Lem. の葉からとれる長さ1メートル余りの繊維は、メキシコでは先住民によって、綱や荒布の原料として広く用いられてきた。これらリュウゼツランの、強くしかも糸に紡ぐ必要のない天然の長繊維が、いたるところで容易に手に入ることは、この繊維で編むか織った前頭帯 *mecapal* による背負い運搬を発達普及させる重要な自然条件だったといえるだろう。

この方法によって、オレンジを一杯つめた大籠（約80kg）のようなかなりの重さの荷を、年の行かない男の子でも坂道を登って運ぶことが可能だった【図4】。前頭帯による背負い運搬が、起伏の多いこの土地で、車輪も荷駄獣も持たなかった先住民が荷を運ぶための主要な運搬手段だったことは、考古学資料や、スペイン人との接触直後にスペイン人が描いた図像資料からも知られる。この図像資料を見ると、旅に出る者も、前頭帯背負い運搬で旅の荷を運んだと推測される。

前頭帯背負い運搬は南米先住民社会でも広く行われており、やはり中米や日本とも共通する、女性の正座慣行とともに、「身体技法複合」としての何らかの内的結びつきが考えられるか今後の研究課題だ。

前頭帯を用いなくとも、布や袋や紐を肩から首の前にまわして背負う運搬法も、スペイン人との接触以前に先住民が描いた図像資料や、現在博物館で展示されている民俗資料や、実際に運搬している人々の姿によって見ることができる。

身体技法としてはおそらく前頭帯運搬と関連して、中米では嬰兒の運搬法として、布にくるんだ横抱きを、背負いよりは多く見かける。



図4 2004年メキシコ・シティの民衆文化博物館で上映されていた、前頭帯 *mecapal* でオレンジを詰めた籠を運ぶ少年のビデオ画面から筆者が撮影した写真。そのため、全体に画像がぼけているが、前頭帯の使い方はよく分かる。

運搬具を必要とせず、ヒトのアフリカ大陸からの旅立ち段階以来、原初はヒトに一般的であったと思われる頭上運搬が、①で現在も著しく普及・発達しているほか、②と③においても、一部の女性のあいだに現在まで用いられているという事実も、社会の価値意識との関係で、比較研究されるべきであると思われる。原初段階で、ヒトの集団移動のとき、男性は武器を持ち、女性は籠などの容器に食料や生活必需品を入れて頭上運搬し、危機的状況では頭上の物を直ぐ放棄して逃げられるという機能的解釈がこれまで一般的だが、個々の状況に照らして、より詳細に検討されるべきであろう。

IV 棒運搬をめぐって

とくに③に顕著に認められる棒運搬についても、その発達の背景を考えるべきであろう。

「杓」という、会意と形声の中国起源の語で、呉音、漢音で「ロク」と読まれ、日本に導入されて「オウゴ」と発音される言葉が、運搬用の棒一般を指す語としてあるくらい、漢字文化圏では棒運搬が広く行われてきた。

ただ、この語の漢字起源と日本語読みの由来にややこだわるならば、この語は、漢字に関してきわめて網羅的な字書である、白川静の『字統』(平凡社、1984)、『字訓』(平凡社、1987)『字通』(平凡社、1996)や、戦前の標準的漢和辞典として定評があり、いま私の手元にある小柳司氣太編『新修漢和大事典』(博文館、1936)には記載さえなく、藤堂明保他編『漢字源』(学習研究社、改訂新版、2002)や新村出編『広辞苑』(岩波書店、1955)等には、採録されている。

和語の「あふご」については、大野晋他編『岩波古語辞典』(岩波書店、1974)によると、室町時代まで清音で、平安中期(931~938)に編纂された『和名抄』に、「杓、和名阿布古、杖名也」とあるというから、平安中期すでに「杓」という漢語が知られていて、ただ読みは漢音ではなく、すでにあった和語があてられたことが分かる。同辞典によると、和歌では多く「逢ふ期」にかけて、「人恋ふることを重荷とになひもて逢ふ期なきこそわびしかりけれ」(『古今和歌集』1058。ここでは濁音読みがあてられている)などのように、用いられていたらしい。

棒運搬と漢字文化圏の関連に私がこだわるのは、竹冠の筆と箸の使用も漢字文化圏と重なり(川田『もうひとつの日本への旅』中央公論新社、2008、10~18頁)、棒運搬、とくに両天秤運搬に、中国では半分に切った太い竹がよく用いられるからだ【図5】。坂の多い町重慶の有名な荷運び人の多くも、太い



図5



図6

図5は、2001年に重慶近郊の土器作りの村で筆者が撮影した。縦半分に切った太い竹の外側を下に向けて、肩に当たるようにして担いでいる。中国の他の地域で見た割竹両天秤運搬でも、図6に図式化して示した日本の、よく撓うトネリコ棒天秤のような、腰を曲げた担ぎ方はせず、ほぼ直立して担いでいた(筆者作図)。

竹を半切した両天秤を用いている。

日本では平安時代末期以後、江戸時代末期までの図像資料からも、「枋」を用いた棒運搬の、ほとんど考えうるあらゆる形態の事例を見出すことができる。

(イ) 棒の末端に、軽い荷をつけて一人で肩に担ぐ(飛脚の文箱挿みなど)、

(ロ) 棒の中央に重い荷をつけて前後二人で担ぐ(土木工事の土砂運搬、人を乗せた駕籠舁きなど)、

(ハ) 棒の両端に重い荷をつけて一人で担ぐ(いわゆる両天秤、日本では特に下肥桶の運搬によく用いられた)。日本の両天秤には、半切の竹よりは、よく撓う木の天秤が用いられた。撓うが折れにくい、スキーや野球のバットにも用いられるトネリコ (*Fraxinus, L.*) は、日本の農村では水田の周辺によく植えられて、立木のまま稲架の支柱にも使われたが、両天秤の用材として特に重用された。

V 弥生型日本人の運搬における腰の重要性

これを身体技法との関連で見ると、棒運搬でも日本の場合特に顕著なのは、上体を軽く前傾させ、腰で調子を取って運ぶことだ。これは、図像資料においても認められ、日本の島根県の私が学生時代から調査に伺っている篤農家で、下肥時代から両天秤運搬に馴れた老齢の男性に、実際に水を入れた桶の両天秤運搬を小川の土手でしていただいて、小川の対岸からビデオ撮影したときにも明らかになったことだ。

つまり、日本人の両天秤運搬では、天秤棒がしなない、歩くにつれて荷をつけた両端が軽く上下に揺れることによって、勿論荷重全体は変わらないが、肩に感じられる重圧感が間歇的になる【図6】。この、運び手の身体に着脱自在、形態としても極めて簡素な日本の天秤棒は、Ⅲ-②に紹介した、西洋の水運運搬用の肩当て、フランス語で *joug d'épaules*、英語で *yoke*、つまり軛くびきと呼ばれるように、肩にしっかりと取り付けられ、しばしば楕円形の輪が腰の高さで両脇の水桶を固定する方式の運搬具とは、およそ対照的な道具だ。

さらに注目すべきは、両天秤運搬においては、液体の入った重い桶を、腰で調子を取ることでわざと上下に揺らしながら進むのに対して、軛運搬では、できる限り水桶を揺らさないようにし、肩と腕の力で運ぶことだ。

人力運搬において、腰が重要であることは、背負い運搬においても、とくに西南日本の「セイタ」など、下部に爪のある背負梯子による場合著しい。背負梯子でも、東北日本に多い「シヨイデェ」「ヤセウマ」などでは、背負った場合の荷の重心が一般に高い。従来日本の民俗学者は、背負い運搬具の西南日本と東北日本との地域差を、形態の上から西南日本の「有爪型」と、東北日本の「無爪型」とに分類して来た。私は形態よりは、荷を背負った時の重心の高さに注目して、西南日本の「腰」支えに対して、東北日本の背負梯子が「肩」支えではないかと考えている【図7】。

西南日本の「セイタ」については、キネシオロジー(生体運動学)研究者河原雅典による、山口県の一地域29例の精密な実測と、シミュレーション・モデルを使っての実験の結果、荷重は、仙骨で支えられているという結論を得た(河原雅典『伝統的背負梯子「背板」はどのように身体にフィットしているか』九州芸術工科大学博士論文、1998年提出、未刊)。

VI 運搬方法のより広汎な比較検討を

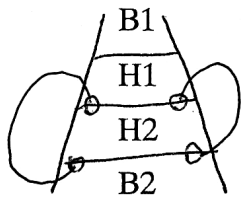
西南日本の「有爪型」背負梯子が、朝鮮半島の背負い具「チゲ」に似ていることはこれまでも指摘されており、チゲに由来しているのではないかという説もあるが(磯貝勇「背負い梯子」、木下忠編『背負う・担ぐ・かべる』岩崎美術社、1989年)、チゲは脚が長く、実際に背負っている写真(孔泰瑢・高二三『目で見る李朝時代』図書刊行会、1986年、など)を見ると、荷は背の上の方に付けており、重心の高

西南日本・低重心型と北東北・高重心型背負い梯子の比較

(日本民具学会第30回大会、琉球大学、2005/11/20、川田順造)

1) 山口県玖珂郡錦町「セイタ」29例

河原(1998)による



	最大	最小	平均
$H1 \div H2 = H$	0.85	0.30	0.53
$B1 \div B2 = B$	0.50	0.23	0.33
$H \times B = S$	0.37	0.08	0.18

S: 荷重重心高指数

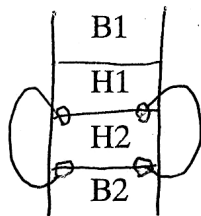
B1 縦棒上端幅 B2 縦棒下端幅

H1 荷括り上横棒・負い紐懸け上横棒間隔 H2 負い紐懸け上下横棒間隔

2) 岩手県下閉伊郡川井村「ショイデエ」33例

北上山地資料館所蔵全資料の川田による計測(2005)

(民俗)



	最大	最小	平均
$H1 \div H2 = H$	2.21	0.61	0.89
$B1 \div B2 = B$	1.19	0.86	1.03
$H \times B = S$	2.28	0.53	0.91

S: 荷重重心高指数

3) 山口例・岩手例の対比

山口例 : 岩手例

H 最大	0.85	2.21
H 最小	0.30	0.61
H 平均	0.53	0.89
B 最大	0.50	1.19
B 最小	0.23	0.86
B 平均	0.33	1.03
S 最大	0.37	2.28
S 最小	0.08	0.53
S 平均	0.18	0.91

図7 西南日本型低重心背負梯子と、北東北日本型高重心背負梯子の対比

(筆者作図)

い、私の調査による東北日本型にむしろ近い。

日本列島でも、アイヌと南西諸島・琉球では、伝統的に重心が高い前頭帯運搬が行われているが（萱野茂『アイヌの民具』すずさわ書店、1978年；下野敏見『日本列島の比較民俗学』吉川弘文館、1994年；佐々木高明「アイヌの文化と沖縄文化」『沖縄民俗研究』第18号、沖縄民俗学会、1998年3月）私が注目したいのは、本州でも北東北の背負い梯子では、身体への固定の仕方が、リュックサック＝ランドセル式ではなく、背中の荷から前に回した縄ないし帯を、前頭部に掛けるのではなく、首の前にもってきて支えるものが多いことだ。首の前にもわした縄を、下からの別の縄で固定する方式もある。

これは荷の支え方の原理からいって、荷の重心がリュックサック＝ランドセル式のものより高くなりやすく、アイヌや琉球、アタイヤル族などの台湾原住民〔台湾では先住民でなく原住民という言葉が用いられる〕に見られる前頭帯による背負い運搬と、リュックサック＝ランドセル式との中間型を示すように私には思われる。メキシコで私が直接見て写真に撮った例でも、前頭帯運搬をするほど重くない物は、特に女性が運ぶ場合、大きな布に包んで首の前で支えていることが多い。

アイヌや琉球、台湾原住民の前頭帯運搬と、北東北日本の首前支え運搬、アメリカ大陸先住民に広く行われている前頭帯運搬および首前支え運搬との、より詳細な比較研究がなされなければならない。

縄文人と弥生人の体形の違い（馬場悠他編『縄文 vs 弥生』国立科学博物館企画展図録、2005年）、それに基づく運動能力の差違について指摘されているところと対比するならば、重心の低い西南日本型の背負い運搬具は弥生人と、重心の高い東北日本型の運搬具は縄文人と、それぞれ対応するのではないかという仮説も含めて、運搬方法のさらに広く詳細な比較検討を行うことが今後の課題であろう。

全般にわたって参照した主要文献

香原志勢（編著）『人力運搬の人類学的・働態学的研究』昭和56年度科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書、1982年

神奈川大学日本常民文化研究所調査報告第16集『運搬具 背負う・提げる・載せる・曳く』平凡社、1992年

織野英史『背負い梯子の研究』慶友社、1999年

特集「日本人の起源 日本列島住民の成立と変遷」『生物の科学 遺伝』61巻2号、NTS、2007年